

敵砲弾の破片で下顎を碎かれ重傷を負った。担ぎこんだ洞窟内の仮設病院は足の踏み場もない程、傷病兵で溢れ、その呻き声が洞窟内にこだまして心が痛んだ。

八月二十一日になった。その日は朝から砲声ややみ、不思議な静かさが戦場に漂った。

我が中隊はこの日を期して敵との決戦に備えていたが敵にその動きは全く見当たらない。中隊本部の司令のないまま壕内でいつでも戦闘できるよう待機していた。

停戦の知らせがきた。

全員一斉に壕を飛び出した。小隊長は中隊本部へ急行した。かねてから玉砕部隊と呼ばれ、明日の生命もさだかでない状況の中での停戦命令、言葉にならない安心感と喜びに天を仰ぎ大きく呼吸した。

八月十五日、終戦の大詔を受けて孫呉の軍司令部はこれを受諾、麾下軍団に打電したが、不幸にも瓊瑋とは早くから通信途絶のため戦闘が続行、十五日以降も彼我多くの戦死者を出した。

停戦の軍使を受け入れた師団長は、八月二十二日停戦を決断され、正午を期し各陣地に白旗が掲げられた。

その後、武装解除―シベリア抑留―復員となりますが、長くなるので、シベリア抑留のことは後日改めてお話しします。

強制抑留の序曲

赤痢を克服し労働

三重県 茶本 光義

満州ではソ連軍が、日ソの不可侵条約を破って越境し、満ソ国境では激烈な戦闘が開始されました。我々兵隊にとっては寝耳に水でした。

その後、昭和二十(一九四五)年八月十五日、停戦、終戦となり、精銳を誇った関東軍は矛を収め、連合軍の軍門に下り、その指示にもとづいて軍命が出ました。満州では軍はもとより、多くの在満邦人もお

り、開拓団の老幼、婦女子に至るまで、その去就に迷うというより生命財産を守る術もなかったのです。私達は、第五軍の弾薬庫に集結し、ソ連軍監視のもとで、一時的な捕虜（抑留）生活をしておりました。

私は、大正十五（一九二六）年四月十八日生まれ、三重県阿山郡九桂村という所が生家（旧姓、林崎）で、現在は三重県上野市に居を構え、戦後の生活を送っております。

戦後五十余年を経た今日においても、当時の敗戦の悔しさや苦しみ、また悲しみを思い返しながら、当時の思い出、特にソ連抑留に至る間の移動時や赤痢に苦しんだ入院生活等、いわばソ連強制抑留、労働の初期の状況について話をしたいと思います。

慶成の第五軍（司令部は掖河で、関東軍第一方面隷下）の弾薬庫での捕虜生活を終えて帰還するという日が来た。私等は、その時、本当に日本に帰れると信じて疑わなかった。中隊長の命令に従い長距離の行軍になる。十分に休養をとり、装具は整理をしていつでも

出発できるようにした。私の班の隊員の人々の顔には、安堵した様子がうかがえた。

疲れを癒すことはできなかった。照明がランプ一個なのでほとんど奥の方だと人の動きも見えない。寝返りを繰り返しながらも疲れが出て朝まで眠った。

六時に不寝番が「起床！」の大声を発する。外はまだ暗い。朝食を炊事場の窓口へもらいに行かねばならない。この収容所は四人一組となり、その中の一人が四人分の飯盒を持って受け取りに行くシステムになっていた。パンは炊事場で三百グラムに切つてある。それを寮で四人分に切るのだからスムーズにはいかない。

しかし、スリーブとパンだけで、七時には各作業隊順に衛門の扉の前に整列して、各班ごとに人員を確認して外に出す。作業は道路を作る段取り、第一番は樹木の切り倒しに行かねばならない。道路は十メートル幅だがその三倍の幅以上に赤松や白樺や樺の木を伐採して、四メートルの長さに切断して運びだすのであるが、すべて人海戦術である。夕方になってから大隊本

部より出発命令が下った。第一中隊より順次衛兵所前に整列、ソ連将校の見守る中を出発した。ソ連軍の警備兵が自動小銃を肩から掛けて、銃をいつでも撃てる体勢で隊列のそばを警戒しながら歩いてくる。隊列が乱れると何かわめきながら発砲をする構え、時には空に向けて発砲するのは威嚇する意図だろう。

二時間ほど歩くと休憩をとりながら行進するが、疲れてきてどこをどのように歩いたのかわからぬうちに着いたところが、ソ連領内のシベリア鉄道のオブルチエと言う駅だった。二日間の行軍なのでくたくたで、レールの枕木の上に腰を下ろす。水筒の中は一滴の水もなく喉がからからだった。中隊長が各班から二人ずつ水を汲みに全員の水筒を集めて指揮班長について汲水場に行くように命じられホッとした。二十分後に二人の汲水当番が水筒を担いで帰ってきた。皆飛びつくように受け取り一口、一口貴重品ののように飲む。この次はいつ汲水できるかわからない大切な水だった。監視兵が巡視に回ってくるが、レール沿いに座って待っているので安心をしたような顔をしていた。

やっとのことで列車が来た。この線路はどうやら引込線のように向かいの線路に度々行き通っていた。ゆっくりと満州鉄道の貨車よりも一回り大きな貨車が長々としてきた。私の大隊が全部乗るのだから車両も「一個小隊ずつ一両に乗車せよ」と指示があった。車両は二段に区切ってあって引き戸を開けると驚くほど大きい化け物のような車両だった。各中隊より順に各小隊ごとに乗車したが、足場が高いので皆で装具を助け合いながら持ってやっと完了した。

大隊長とソ連の将校が確認に回って来た。いつも通訳が一人ついて来る。列車の最前車両は指令車になっていて、大隊長以下幹部やソ連引率官が同乗しているようだった。また警備兵も前後車両に分乗して監視を怠らない。中ほどの車両は軍医や衛生兵、病人の診察室になっていた。

いよいよ出発、発車前に警備兵が全車両の引き戸を閉めに回ってきた。十センチほど引き戸にすきまを開け鍵をかけていく。上段の上に鉄格子の窓が左右二カ所あるだけなので、九月半ばだと日中は摄氏四十度以

上になる。車両の中は五十人の兵隊と装具が所狭しと載っていて、戸の側には大きな木箱が置いてある。中央は大便をする時にまたいでできるようにして、下には砂が敷いてあって、その砂の下に「抜き差」ができるよう前側は空けたままである。小便はパイプを使って車外に垂れ流しといった具合で、監獄よりもひどい非衛生的な手法で輸送する原始的やり方であった。

食事は各自の乾パンや大豆の煮たもの、麦の煎ったものを少しずつ食べた。水は喉を濡らす程度にしないといつ補給ができるか分からないので大切にしていた。一日止まっては走り、また止まる。この貨車は臨時列車なので、シベリア鉄道は複線だが時刻通りに走れない。といってもどうも東方向に走らずに、西方向に走っているという事は、ウラジオストクには行っていない事が分かってきた。

皆、変だなあ、これだとシベリア中部に向かっていくのではとの思いが走った。停車をして監視兵が監視のときに聞いてみようと云っても、結局諦めるほかにはどうすることもできない。しばらく走ってちよっと

大きな街へついて停車をした。

ソ連の将校と通訳が来て、給水のため二人ずつ車両外に出て水を運ぶように許可が出たので、全員水筒を預けて汲みに行ってもらう。当番の人は大変だが外に出られるので皆買って出て「この次は俺にやらせよ」と争う有様だった。籠の鳥だから外に出たくなるのは当然だった。

一時停車してまた出発だ。水汲みに行った当番の人が「バイカルが何の方向か」と聞いたら、監視兵は進行方向を指さしたそうだ。いくら走ってもウラジオは遠くなるばかり、シベリアの奥地へ送り込まれることは確実と車内はざわめいた。もう日本には当分帰れそうにもないなあと溜息をつくばかりだった。

翌日だった、隣の中山さんが急に腹痛を起こした。

土地が変われば水も変わると言われる通りだ。下痢をするようになり、回数が多くなってきた。二段ベットの上段なので上ったり下りたりが大変なのだ。手伝わあげたりもしたが、中山さんの容態は悪くなるばかり

りであった。今度停止したら診療車の方へ移すよう小隊長が言ってくれた。誰かが正露丸をくれたが良くならないので、停車するのを待つしか無かった。

思ったより早く二時間程度走って停車したので、小隊長が大声で監視兵を呼んだ。監視兵は通訳を連れて走ってきた。「この兵隊が下痢を始め、腹を痛めている。列車の止まっている間に診療車両へ移すように」と告げた。監視兵はすぐに衛生兵を呼び、引き戸の鍵を外して開け、中山さんを荷車より降ろして診療車へ連れて行ったのでやれ安心と思ったが、下段にいる人が「大便の箱に赤い血が付いている」と言い出した。班長が確かめたら大便箱の中の砂にたくさんの血便が出ている。多分赤痢に違いない。私は降りて看病をしていたのでちょっと心配になった。

一昼夜ほど過ぎた頃、私は少し下痢を شدした。「これはいけない」と思って班長に申し立てた。班長が正露丸を出してくれたので早速飲んだが、段々下痢がひどくなるばかりで効かない。腹は痛いし我慢ができなくなり、このままでは皆さんに迷惑がかかると思い

「診療車に行かせて下さい」と申し立てた。班長が小隊長にその様子を話してくれた。やがてオノホイという駅に停車した。

小隊長が監視兵に連絡をとってくれた。やがて衛生兵と通訳が来てくれ、将校に許可を得て診療車両へ移してくれた。軍医はやはり赤痢に間違いが無いとの診断で隔離となり、中山さんとならんで横になった。とにかく何も食わず飲まず、ジッと下痢止めを飲んで休むべしだった。

その頃に「山が見えてきたぞ！」とか「海が見えるぞ」など大声で衛生兵が話し合っているのを聞いた。やっぱりバイカル湖に近づいているなあと感じた。しばらくの間列車が走って停車をした。今度は監視兵が、ガチャガチャと順番に貨車の引き戸の鍵を外して歩いているようだった。衛生兵がこの駅で全員を解放するようだと話していた。やっぱりソ連将校と大隊副官が、通訳の話しとして、このバイカル湖の岸辺の砂浜で飯盒炊飯をせよという指令が出た。携帯食料の米で飯を炊けるのである。衛生兵も車外に出ていった。

軍医も外に出たようだった。

私達患者は横になったままでいた。患者は皆血便をしているので他の兵隊に感染してはならないので隔離状態のまま、車外には出られない。動くも腹も痛むし血便が出るので静かにしていた。外ではワイワイと騒がしい。千人近い兵隊が飯盒炊飯をするものだからにぎやかだ。二時間の休養をとり再び乗車の命令が下った。全員が乗車を終わると列車は発車した。四時間ばかり走ったと思う頃にイルクーツクに到着をした。大きな街らしく何本かの列車が轟音を立てて行ったり来たりして、入れ替えや切り替えしているらしかった。一時間程停車をして再び発車した。また四日ほど走ってタイシエットに到着。駅も結構大きな街らしく列車が行きつ戻りつ荷車の入れ替えをしているようだった。

一時間ほど過ぎた頃「ドン！」と荷車が揺れた。機関車を連結しようだと衛生兵が話し合っていた。すると今度は進行方向が逆になったようだ。その中に誰

かが並行に走りだしたような気がする、いよいよシベリアの奥地へと送られるのではないかと話している。もうこの体では耐え抜くことはできないと思つて覚悟を決めていたのを忘れられない。

シベリア本線を後に北へ北へと二日ばかり走り終わって停車をした。小さな駅で人家もまばらで三、四人の駅員がいた。監視兵が引き戸の鍵を外して歩いているようだった。三人ずつ一組みの歩哨が何組みか、我々を迎えに来ていた。全員下車の命令が伝えられた。広い原野の広場である。各班、各小隊、中隊ごとに点呼をして歩哨達が両側に三人ずつ整列した。小隊ごとに駅を後に出発を始めた。私達患者は最後尾に馬車に乗って歩哨に監視をされながら追従していった。一時間余り歩いた後方に丘陵地が見えて四メートル以上もある板囲いと見張櫓が近づいて来た。やっと我々捕虜が入られる収容所に着いたのであった。側に行つてみると頑丈な板囲いで、板囲いの側に鉄条網を張り巡らせてある。広さは四百メートル四方はあつ

たと思う。中央に大きな格子の引き戸があり、両方に衛生兵が立っていて警備兵が控えている。板垣いの四隅に望楼がそびえ、投光器が備えてあり、重機関銃も備え付けているのが見えた。

門の前に到着した。大隊の第一中隊から人員を確認しながら門内に入所させ、また中で人員を教え直して広場に整列をさせていた。私達病人は最後に監視兵に見送られて入所、そのまま診療所に隔離された。大隊は各中隊ごと小隊別に兵舎に収容されたようだった。

私達はほとんど隊内のことは分からないまま収容所内の隔離室で療養生活にはいった。

その後も次々と患者が各隊から出て、隔離室の板張りのベットもいっぱいになってきた。診療所内での治療はほとんど無く、ただ絶食と水分もとらず腹を温めるだけ。衛生兵が湯を沸かして水筒に湯を入れ替えてもらって腹部に当てて安静にしているだけだ。

腹が痛くて便所に行くときでも、抱えていくようにやかましく言われる。それは赤痢になると、高熱が出て口が乾くので飲んではいけない水筒の水を飲む。患

者が隣の患者の水筒の湯を盗むことがしばしばあるの
でその行為をさせない。そのため絶食と絶水すること
で体力が消耗するが、次第に下痢が止まり血便が出な
くなって来る。だがその辛抱ができない。必ずと言っ
て良いほど、その後腸壁が破れて多量の血便を排出し
て死亡するのを度々見た。

ソ連ではこれしか治療する方法はなかったのであ
る。当時ソ連には赤痢病などなかったのかも分からな
い。彼らは水には、特に生水には抵抗力が強いのでア
メーバー赤痢等には感染しないのだろう。二十日ほど
過ぎてソ連軍軍医が来て入室患者で病の軽い兵隊をタ
イセットの療養病院へ移すと伝えてきた。軍医が私達
六人を指名してきた。私達はこの部隊から離れること
は最もいやな事であるが、命令には従わなくてはなら
ない。隔離室が患者が増えてベットが足りなくなっ
てきたからだ。早く入室しているし病気が軽くなっ
たのだから致し方ないことだと思った。

翌日、もう十月に入ったというのに大雪が降った。

午前十時、良く晴れた日だった。診療所前に馬橋が一台来た。私達六人はソ連軍医と監視兵の付添いのもとに収容所を出て、駅まで行って列車に乘せられ、タイセットの陸軍病院へ入院した。まだその時は病院はそれほど入院患者は多くなかったが、みるみるうちに患者が多くなってきた。ほとんどが赤痢患者である。輸送列車の中で感染し発病した人が大半だった。体力を失った人で発病した人は気の毒に死亡する人が多くなった。

病院では、衛生兵やソ連の医師や軍医のほとんどが女医で、看護兵が右往左往して日本の衛生兵を追い回している。遺体の片付けや掃除、亡くなった人たちの装具等、私達はどこの部隊の人か分からず、ましてや氏名、出身県等も判明せず片付けて、遺体は衣類を脱がせて外へ出す。外はもう零下二十度に下がっているので、すぐに凍結してしまうから霊安室は遺体でいっぱいになると話し合っていた。墓地の穴掘りが思うように進まないようで大変なことからしい。墓地が地下メートルも凍っているので手間どって困ると衛生兵が

話していた。

私の体調は足元が不安定ながら血便もなくなった。軍医が少しずつミルクを配給すると言ってくれた。一日に一回だが口に飲物が入るのは二カ月ぶりだ。体は骨と皮だけになっているのでもとの体になるにはだいぶ先になりそうだ。それでも病気が峠を過ぎたと大変嬉しかった。油断をせず養生に努めることに専念した。時には衛生兵の手伝いもかって出て便所の掃除や床の掃除もした。

外はしばしばバイカル湖からの寒波に見舞われ、零下三十度以下になる日が多くなってきた。一カ月ほど入院生活をしてどうにか普通に歩けるようになった頃に退院するように指示が伝えられた。軍医が一人一人診断をして三十人、午前十時気温が少し上がった頃、隊員患者が装具を背負って、軍医、衛生兵一人と警備兵二人が付き添ってタイセット駅に向かった。長い間温かい病室に慣れ外気に触れることがなかったので体が縮むように寒気が身に沁みた。

駅について間もなく貨物列車が入ってきた。一両の

荷車に乗車の指示があり、乗車をしたが荷車の中はまるで冷蔵庫のような冷え切りようで震え上がった。暖房はなく衣類も敗戦当時のまま、毛布や天幕などで体を包むが寒さは変わらない。誰一人として話す気力がなかった。二時間近く列車が走った頃に小さな駅に停車をした。下車を指示されて下車。凍結した道路を付き添って来た監視兵や軍医、衛生兵と共に遙かに見える收容所に向かってぞろぞろと歩いた。履いている靴は終戦時の軍靴で、シベリアでは全く通用しない。軍足を二重に履いているが足が凍傷になりそうだ。

やっと一時間歩いて收容所の衛門に着いた。衛門の守衛が人員の確認をして所内に誘導する。所内には日本の将校が迎えてくれた。もちろん元の隊ではなく混成大隊で寄り合い世帯のようだった。隊長は少佐だった神谷殿だった。温厚な方だったことを記憶している。第二中隊に編入された。中隊長は山口新一中尉殿だった。この方も肩を張らない人で病み上がりの私どもは安堵した。兵舎の中には三基のペーチカ（暖炉）がある。二段ベットがコ字形に配置された寒々とした

兵舎であった。

夕食にはシャブシャブのスープを飯盒の蓋に一杯のみの配給だった。兵舎の中は明かりが何もなく、ペーチカの薪をくべる焚口の燃える炎の明かりが灯明だった。便所も外の出口にあり、二棟の兵舎に一カ所しかなく距離がある。そのため夜は特に冷え込むので、玄関のすぐ外で用を足すから、凍りついているので足元に気をつけねばならなかった。ベットの上段の人は多少暖かいが、下段の人は寒さがしのぎ切れないので体を寄せあい、毛布や外套等装具の着れる物は全部身にとまとい寝る。が、なかなか寝付けないのであった。

眠れぬままにやっと一夜が明けたが、外は深夜のようになり真っ暗、七時に朝食の時間なので食事当番が炊事場へ受領に行く。四班に分かれているので各班四人で取りに行く。炊事場が一番奥の建物なので二百メートルはある。食事当番になると大変だ。その上、固い飯なら良いが、どろどろの粥など、スープになるとまたまた大変。人の歩く所は雪を踏み固めて凍結しており、ずるずる滑るのでこぼすことしばしばである。少

ない量の食事だ、貴重な食べ物だ、ひっくりかえたらもう大変。隊の人は減食されることになるので責任をとらされる。一晚寝ずにペーチカ焚とか、便所掃除をやらされる。

食事当番が来ると拒否はできない。もつと嫌なのは分配するときだ。各自の飯盒を二列に並べて缶詰の空き缶に柄をつけた杓で一杯ずつ入れて、さらに残ったものを全く平等に配るのが難儀な仕事。四十人の目が、あたかも獣が獲物を狙っているような目で公平であるかなきかを着視しているのちよつとのすきも見逃されない。まだ液状のものはその中でもやりやすい。黒パン、当時のパンは皮肌が固く良く切れる刃物で切っても皮の方は崩れて正確に切れない。幅が十五センチ長さ三十センチ厚さ十二〜十三センチだったと思う。雑穀の粒に小麦粉を混ぜた物を練ってイーストで発酵させて焼いたもので重さは二キロほどある。二十人に分ける。天幕を敷いて、拾ってきた金具を石等で研いだ包丁で切るので、普通はパンの耳というが、皮そのものが壊れて、中は少し堅いが皮の方はポロボ

ロになる。その粉をまた二十等分にしないと皆納得できないのである。

器用な人は白樺の木で秤を作って目方を計ると言い出したが、そんなことをすると時間がかかって作業に出るまで間にあわないと言い出し、この話は無しになった。すべてこの世の中の人間も含めて生きるためには食べる。衣、食、住の三原則と、この世は弱肉強食ということもまた身に沁みて悟ることができた。

十一月に入って時々ペーチカの薪木を取りに収容所外の白樺林へ小枝を拾いに連れだされたこともあった。しかし軍服が終戦時のまま、靴もその編上靴なので、雪の深い所にはまり込んで、警備兵が探すのに苦労してからも薪取りは禁じられた。風が吹くと灰のような雪なので丘陵地では波のように凸凹に積もり、草原では積もらずほとんど雪がない所もある。降った雪が凹地に寄り一面平らになるので背丈まではまる事がある。

十一月の半ばに大勢のソ連側の将校や係員、通訳、

大隊長、中隊長が一人ずつ順番に呼び出して出身地氏名を尋ねて捕虜カードが作成された。そして登録を始めていたソ連側の台帳に記入された。今までに亡くなった人や行方不明の人は、関東軍司令部等の軍歴簿とは合致しないはずだと思ふ。病院等で亡くなった方やソ連軍と戦って戦死をされた方々はどうなっているのだろうか、行方不明の方も多数いたと思ふ。捕虜カードで登録できなかった方々は永久に浮かばれないだろう。

一月に入つて二キロ程離れた収容所に移動の命令が伝えられた。ちよつと落ち着いたのも束の間、全員収容所の広場に集められ、捕虜カードの名前で呼び出され、衛門前に並んで門外の警備兵の指揮の下に入れられた。一個中隊二百人が装具を背負い、山の上の二キロ離れた収容所に警備兵に追いつてられながら、そして重い足をひきずりながら坂道を行軍して行つた。四十分ほど歩いてやつと第二収容所に到着した。皆栄養失調になつていたので足の運びが遅く、警備兵がイライラして大声で喚く。

衛門前に整列をして、守衛に指揮官の氏名は忘れたが日本の少尉が通訳と話をしたら、捕虜番号順に門内に入れられた。随分時間が費やされて全員入所した。その間立つたままなので足が冷たく凍傷になりそうだった。幸い風雪がなかったので何よりだった。

二十人ずつ捕虜番号順に三個中隊の中へ編入された。各中隊の小隊長が受取り、引率に来ていた。この頃はソ連側は日本側の将校を優遇していた。捕虜等の暴動や混乱を避ける狙いだらう。日本兵は上官の命令には絶対背かない事を知り抜いているからだ。

我々収容所の兵隊はシャブシャブのスープや黒パン二五〇グラム、カーシャ(粥)飯盒の蓋に二杯では栄養失調の人が増すばかり。毎日一回は炊事場の暖房用の燃料に四キロ程離れた製材工場に三メートルに切つた廃材を担ぎに行く。警備兵に監視をされながら、行きは歩くだけだが、帰りには瘦せた肩に載せた廃材に風雪を受けるとふらふらと倒れそうになり、耐え切れずに廃材を落としたり転ぶ将兵もいる。その度に小隊長が走つてきて気合を入れる。警備兵も走り寄ると罵

声を浴びせる。

捕虜の苦汁は例えようのない屈辱を思い知らされた。そんな日々を送っていたある日、小隊長に兵舎で使う水汲みの使役を命じられた。ピア樽を乗せて網を取り付けた小さな橋を引つ張って水汲みに行くのだが、二キロほど行くと川があり、その川の厚い氷を割って水を汲む作業だ。氷を二メートル四方に深さは約二メートルほど掘らねば水が汲めない。ボールとスコップを使って、氷はボールで突き刺すと力があるが案外良く割れる。割った氷をスコップで外に掘り出して。一メートル八十センチまで掘り進んだところを見計らって外へでて、上から丸太で打ち突けると氷の底が破れて水が吹き上がってくる。これでしばらくの間水割はしなくても済むと思ったが一週間もすれば水の泉が凍って元の川になってしまう。

一人で収容所を出入りが許されて気も晴れることもある。この大変な作業も一カ月ほど続いたが、三月に入って身体検査があり、私は体力が四級に減退したの

で保養所へ送られることになった。赤痢で体力がないのに一般の人と同じ生活をしているので回復ができず残念だと思ったが、翌日トラックで二時間ほど走って、今は場所は定かではないが、穏やかな山裾に白い建物が見え、近づくとは病院のようにも感じられる保養所に着いた。

保養所門で衛兵所の守衛に付き添ってきた係官が捕虜カードの申渡しをして警備兵と共に帰って行った。その後には所内の公園のような広場へ引率され、十人ずつ分けられて四十人収容の寮に案内された。以前より入寮している先輩に自己紹介をして、所内の設備や生活の内容などを教えてもらう。食事の方は今までの収容所とは違って栄養の行き届いた食事ばかりで、ベッドもマットが付いていて板敷きのベッドとは全く違い寝心地も良い。

三月に入ると、寮は南に傾斜した山腹なので日中は暖かく心地良い生活環境だった。風呂もトルコ式の風呂はソ連と同じ形だが、きれいになっていて、蒸風呂から出て石鹸が備えてあり、水も充分にもらえて入

浴をした喜びを味わった。衣服類はどの収容所も同じ、高温乾燥、滅菌、蒸室に自分の着ている衣類全部を針金の輪に通して滅菌蒸室に入れてもらう。摂氏八十度で四十分ほど入れて密閉し虱や南京虫などを殺虫し消毒をする。前の収容所で乾燥室から火が出て入浴中に衣類が全部焼けた事もあった。

しかもここでは、日中は暖かなので草の芽が出てくるので、毎日庭へ出ては種を播いたり、親しくなった同僚の人と郷里の話や在満当時の隊の話題に事欠かなかった。一カ月過ぎた頃に体調の良いものは午前十時に衛門所前に集合するように、と保養所事務所より命令が伝達された。軽作業との事だった。各寮より半数くらいの人が衛門所前に整列をした。指揮官の将校と監視兵が付き添って人員を掌握して門外に出て一キロほど行ったところに製材所跡があり、用材を取った廃材が並んであった。製材機もまだそのまま放ってあった。指揮官が体力にあったものでよいかから担いで順番に並んで出発するように指示する。

第二収容所から来た知人も話し合えることができ

て楽しい作業だった。一時間で衛門前に到着した。監視や指揮官の人員点検後、炊事場の横の燃料置場に積み上げて寮に帰る。久しぶりの作業で皆が少し疲れた顔をしていた。庭の草も良く伸び、小さな草花が咲く春が本格的に訪れてきた。私もだいたい体力が付いてきたし、足が軽く動くようになってきて、広場で体操をしたり、縄飛びや軽く走ったり、体力を調整したりして日々を送った。

時には近くの農場へ馬鈴薯の植え付け作業に行ったこともあり、農場の人々と働いた日もあった。しかしそんなことは長く続かない。三カ月の保養所生活の終わりが来た。事務所の医務室の軍医の身体検査が行われた。裸にして尻の肉をつまんで三級と言われ、衛生兵と所長が明日退所と命じられた。どこの収容所に送られるか不安な最後の一夜を過ごした。

翌日八時に事務所の係官が通訳と寮へ入って来て退所者の名前を読み上げた。私の寮からはほとんどの人が退所者だった。三カ月ともに寝起きた友人と行くところは同じだと思いと心強かった。午前十時に退所

者は装具をまとめて衛門前に集合の号令が伝えられた。しばらくの間であったが寮を振り向きながら衛門前に集合した。やがて所長が一人ずつ片言の日本語で捕虜カードを読み上げ呼ばれた。順に門の外にでて並び、警備兵が確認をして五列縦体に数えやすいように並ばす。全員で百五十人だったと記憶している。

指揮する将校が出て来て警備兵に出発命令をする。

私達はどこに連れていかれるか分からないまま歩き続けた。来る時は病人扱いだったが、今度は完全に捕虜扱い、「ブイストラ！ ブイストラ！（早く歩け）」と急がす。ソ連人は背も大きい足も早い。日本人は小股で歩くので歩く速度が自然と遅ってくる。それで彼らは遅いと言う。まして保養所出のホヤホヤ、無理がないと理解して欲しいが、指揮官は目的的に日中に着くようにとヤキモキしていたのだろう。

一時間毎に休息を取りながら、出発にもらった水筒の水、黒パン三百グラムだけが頼りである。この頃はだいぶ暖かくなっていたので休憩には五分でも横になれた。追われ追い立てられながら、通り過ぎるトラッ

クの列に砂塵を被せられる。ソンドラ地帯に作られた筏を繋いだような木道は、トラックが荷物を満載して走っても、揺れるが沈まない構造になっている。多量の木材を敷き詰めてその上に直径が四メートル余り長さ二十メートル余りの松丸太を真二つに割った材を並べて、下の台座の材料までドリルで穴を開け通して、檜のような固い木の棒を打ち込んである。一キロも二キロも続くこともあった。

恐らく流刑地になったシベリアに送られた囚人たちが作った道路や木道だと想像しながら渡ったのであった。まだ日が短い時期だ。四時には薄暗くなったところに三十八収容所に到着した。皆くたくたになつていた。収容所の外形は同じ作りになっているが変だなあと直感した。衛門前で警備兵の点検を受け、収容所長が出て来て、指揮官より捕虜カード順に呼ばれて門外に進む。衛兵所はどこまで行っても同じ作りだが兵舎が半地下室の天幕だった。どの兵舎も皆天幕兵舎であったことは驚いた。

二十人ずつ各中隊に配属された。夕食はどこへ行っ

てもカーシャ、飯盒に半分に満たない食事ではとても空腹を慰めるまでにはいかなかったが我慢をするしかない。各作業班に分けられた。私は道路工事作業班に入ることになった。半地下の天幕兵舎での一晩日、二段ベットの二段で寝る板張りベットでは長旅の疲れは取れない。

伐採には、大きな両引きの鋸で二人一組で呼吸を合わせて、引いたり押ししたりしながら切断するのであるが、一メートル五十センチもある鋸本体が二十キログラムある。切る松などの直径は一メートルもある。横に鋸を左右に引くのは技術を要するのに、ソ連の監督はすぐに手本を見せて仕事にかかれという。現在は、チェーンソーという機械があるが当時のソ連では江戸時代のような作業風景であった。

このようにして、新しい作業にかかわされたわけで、その後からは本格的な強制労働が始まることになった。

さらには、いわゆる民主グループと称する委員、民主ではない共産グループにより洗脳教育もあり、心身

共の戦後強制労働、抑留が始まるのであるが、時を改めて体験を書き綴りたいと思います。

戦車隊を体験して

福岡県 石橋 孝幸

昭和十五（一九四〇）年三月五日、現役兵として入隊するまでは家業の薬工品の集荷卸販売業をしておりました。従業員は二十人おりました。

家族は父母と兄嫁と私、弟、妹に兄の子供二人の八人家族で、兄は応召中で、坑州湾上陸部隊の通信隊におりました。

昭和十四年夏の徴兵検査で甲種合格（戦車）になりました。私は小柄なので戦車兵に選ばれたのだと思いましたが。ちょうど満州のノモンハンでは日ソ両軍が血戦の最中でした。

甲種合格者は欣喜雀躍、打ち揃って祝杯をあげ、胸を張って家に帰りました。男手がなくなるので留守が